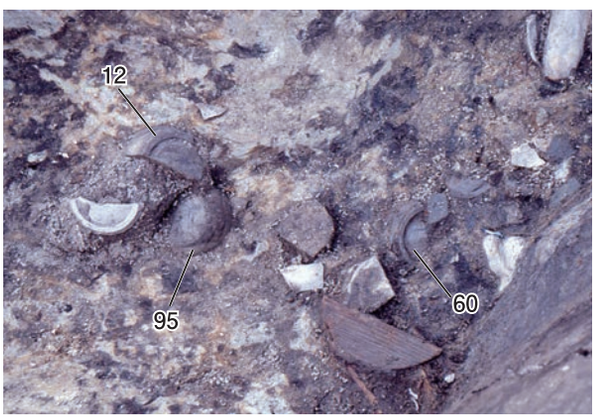
Ⅲ 遺 物

1 墨書土器

a. 文字

主に、本流ＳＸ１とその支流ＳＸ２・ＳＤ１及び、井泉１（ＳＫ36）からの湧水を本流に導く溝ＳＤ２の覆土から、221点の墨書土器が出土した。その内訳は、須恵器209点（ヘラ書き１点を含む）、灰釉陶器４点、山茶碗７点、白磁１点である。これまでに、岐阜県下で知られている古代の墨書土器の数に迫り、須恵器に限ればこれを凌駕する[*1]。その内、解読されたものが121点を数える。これらは弥勒寺西遺跡の性格を端的に示す象徴的な資料群である（図19 ～ 38，表４）。



ＳＤ2 「寺」(12),「麻」(95),「巳人/巳人/巳人」(60)

墨書土器に限り、実測図の縮尺は３分の１で、写真は墨書部位を中心に示し、文字の解読を主眼に明暗を調節した。「そのほかの遺物」の(35)と(168)は、版組みの途上で墨書の存在に気付いたため、そのまま「そのほかの遺物」（図68，74、縮尺４分の１）に掲載した。なお、実測図における一点鎖線は、土器を成形する際の調整技法の変わり目（主にケズリとナデの境目）を表現している。

解読した文字に付した丸括弧（Ａ）は、文字がＡである可能性が極めて高いと判断したもので、括弧内が空白の場合は、墨が流れたり、その部位が欠けていても、文字の存在が確実とみられるもの。□は、文字であることや、その数が認識できるが判読が困難なもので、可能性の高い文字を□［Ｂヵ］と付記する場合がある。さらに、推測を入れた見解は、表４の「備考」欄に記した。したがって、解読の確からしさは、備考→Ｂ→Ａ→文字、の順に高くなる。また「―」は、文字とは認定しがたいもの、例えば筆を整えた痕などを意味する。文字と文字の間の「・」は、墨書部位が異なる場合を、「／」は、同一部位に複数の文字がある場合を示したものである。なお「…」は、文書であることを示す。また、筆致が同じか、似ていると判断した文字には、「筆致」の欄に記号（形と色で区別）を与えた。

以下、同じ文字を手掛かりに、共通性をある程度勘案した分類で報告するが、それぞれの墨書土器が持つ意味や使用法、目的を特定するものではなく、あくまでも作業仮説である。

公的な施設 「大寺」(2, 4 ～ 9)が７点、「寺」(1, 3, 10 ～ 12, 14 ～ 18, 20 ～ 26, 29, 30, 33, 208)が、［寺ヵ］(32, 138, 210)としたものも含めて24点、この他に「寺家」(13)、焼成前にヘラ書きされた左文字の「寺」(19) がある。合計すると33点で、解読できた点数の実に４分の１以上を「寺」が占める。これらの「大寺」,「寺」が「弥勒寺」を指していることは言を待たない。

＊1 美濃加茂市民ミュージアム 2001「岐阜県出土文字関係資料」『文字の登場、そして広まり－古代中世の人と文字をめぐって－』で集成された「岐阜県出土文字資料一覧」によると、この時点で須恵器墨書159点・ヘラ書き28点、灰釉陶器墨書94点・ヘラ書き36点が拾集されていた。

(19)は、文字を日常的に用いない工人たちが、「寺」すなわち「弥勒寺」に納めるべき製品の一部に記号として記したものと考えられる。稲田山古窯跡群(各務原市須衛町に所在した美濃須衛窯の一つ)に、同じ器種に同じヘラ書きのある個体が知られている[*1]。

次いで、多い文字は「厨」(34, 35, 37 ～ 39, 41 ～ 43)で、[厨ヵ](40)としたものを含めて９点ある。因みに、弥勒寺東遺跡では、郡庁院内の廃棄土坑から１点出土している。

「家」に関わる墨書が、既述の「寺家」(13)に加え、「林家」(27),「路家」(28),「家方」(31)の４点ある。「家」は、役所や公的な施設を表す[*2]ことから、「寺家」は文字通り、寺院の経営を司る役所の存在を、「路家」は、交通の要衝に位置する弥勒寺遺跡群が持つ機能との関わりを推測させる。

「塔」(80, 84)が２点あり、これらは筆致が同じである。寺院の塔を指しているとすれば、「大寺」,「寺」,「厨」などの所管を表わす墨書土器の一群に比べ、より具体的な堂宇を直接示すものであり、使用する場所や用途を限定するものと考えたい。

吉祥の文字　「冨」ないし「富」に関わる墨書が、「冨」(45),「田冨」(44, 46, 47) ３点、「冨徳」(49 ～ 51, そのほかの遺物35) ４点、「富井」(48)の合わせて９点ある。「冨徳」は、すべて筆致が同じである。

「福」及びこれを含む墨書が、「福」(107),「福□」(105),「大福」(108),「定(福)」(90),「福/比□」(102)の５点ある。(102)と(105)は、筆致が同じである。(102)の「福」と「比□」は、筆が異なる。

「万(歳)」(99, 100)が２点あり、これらは筆致が同じである。

用途・目的　「供」(89)が、「(供)」(87, 88)としたものを含めて３点ある。専らお供えに用いたか、供物を調える施設、あるいは部署を示すと考えられる。

「常」(93, 94)が、「(常)」(195)としたものを含めて３点ある。すべて灯明への転用が認められ、特に(93, 94)は油煙が全体に厚く付着し、よく使い込まれている。灯明として使用することの表示か、「常」と呼ばれる施設、あるいは場所での使用に限定した器物であることの表示など、灯明との何らかの関連を想起させる。しかし、灯明に転用された土器はこれら以外に多数あり、墨書された土器が灯明に転用されている例も、この３点に限られない。

役割・職掌　「女」を含む墨書に「鬼女」(72),「稲女」(77),「得女」(78)の３点がある。「鬼」は、第１画目を欠く呪句に見られる一般的な字体である。これらは、職掌的なものや祭祀における何らかの役割を担った女性の仮名と考えておきたい。また、女性に関わるものとして「□古刀自」(73)がある[*3]。そのほかに「朝□[臣ヵ]」(117)がある。

習書　「身/月/田/園」(71)は、坏身の高台内側で墨を使った、ほぼ完形の転用硯である。高台で筆を拭った痕があり、坏の側面で手習いをしている。「身」を４回、「月」を２回と、逆方向から大きめの字で「園」を１回と「田」を大小２回書いている。「身月」は、「ムゲツ」と読むことができるが、この表記は、史料には例が見い出せない。

＊1 各務原市教育委員会　1981『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』

＊2 律令制下の行政施設「郡家」(ぐうけ)、「駅家」(うまや) などがその最たる例に挙がる。

＊3 あるいは人名か。大宝２(702)年の「御野国加毛郡半布里戸籍」に、「県主族安麻呂戸」の戸主弟の妻「牟下津古刀自売」とあるのをはじめ、９戸に10人の「古刀自売」の名がみえる。因みに、戸籍の故地である東山浦遺跡から出土した墨書「里刀自」(里の経営に重要な役割を果たした女性、里長の妻の尊称か)は広く知られている。富加町教育委員会 1978『東山浦遺跡』

人名　僧侶の法号と思われる「南(榮)」(61, 65)が、「南□[榮ヵ]」(68)としたものを含めて３点と、「南」(62 ～ 64, 69)が、「(南)」(70)、「□[南ヵ]」(66, 67)としたものを含めて７点、合わせて10点の「南」がある。その半数は坏の側面に書かれており、しかも、側面に墨書された文字の内で、解読できた10点中の半数をも占める。したがって、「南」と一字のみ書く場合も、「南榮」を指している(「榮」の省略)と推測できる。

このほかに、「廣万」(52)と「廣万呂」(53, 54)がある。これら３点は同じ筆致である。また、「真枚」(56)、「真□」(55)、「秋廷」(97)、「□廷」(98)などが人名と考えられる。

「南榮」で見たように、側面の墨書は人名を記す場合が多いと考えられることから、側面に墨書された「中」(119)や、側面ではないが、これと同じ筆致の「中」(120)、「(中)」(118)も、人の名前を表わしている可能性がある。

文書　「安…/如…」(76)は、２行にわたる「安」と「如」から始まる文書と思われ、「…の如く」、「…を安んじる」などと読めば、除災招福の呪句とみることができる。残念ながら、これらより下の文字は、土器の表面が剥離して失われており、全体の意味が取れない。剥離の縁辺には、針や刀子のような利器の尖端による小刻みな擦痕と、中央部は、細かな敲打痕が無数に観察でき、底を打ち抜かないように注意深く剥離が行われたことがわかる。土器の機能を奪う打ち欠きではなく、文字の記載部分を欠くことに目的があり、しかも、２つの句のそれぞれの頭の文字だけを残している点が注目される。

そのほかの文字　「橡」(113, 116)が、「(橡)」(112)としたものを含めて３点ある。「つるばみ」はクヌギの古名で、ドングリのカサから採る染料で染めた衣の色を指すが、土器自体に染料を入れていた痕跡はない。橡を実のまま入れた容器、あるいは橡で染めた衣を着る人やその身分を指すものか、いずれにしても、それらとの関連は想像の域を出ない。

「巳人/巳人/巳人」(60)は、底部中央に大きく「巳人」、その両脇の下に極めて小さく「巳人」と記している。「巳人/( )人/( )( )」(57)も同様であることは明白である。２点とはいえ、複数存在することから、儀法によった書き方であることが推測され、呪的な意味合いを感じさせる。

そのほかに、地名と思われる「大田嶌」(74)、井泉１(ＳＫ36)から出土した「池」(111)、「畠」(92)(「小」と「田」を組み合わせたような文字、あるいは「當」の略字か)、記号の「＋」(125)のほか、「朝□/於」(114)、「麻」(95)、「成□」(101)、「甲」(75)、「継」(110)、「定」(91)、「了」(79)、「(人)」(58, 59)、「(所)」(126)、「(器)」(36)、「(於)」(115)、「(一)」(194)などがある。

なお、山茶碗に平仮名で「こ□/とよ」と読めるもの(212)、白磁に花押[*1]状の記号が記されたもの(219)がある。

b. 器種・部位

墨書土器の器種と部位について見ると(表２)、高台の付いた坏身の底部外面への墨書が28.9％(墨書土器全体に占める割合)と最も多く、約３割を占める。高台付きの坏身は、硯に転用されることが

＊1 個人の署名として用いられる記号。草書が略されて模様化したものや、文字とは関係ない物の形をとったものなどがある。

表２　墨書土器　器種・部位

※文字・点数・筆致の比較　解読できた点数／点数

部位／器種	外面に墨書のあるもの				内面・外面	内面にのみ墨書のあるもの	小計／合計
	底部のみ	底部・側面	側面のみ	小計			
高台付坏身	大寺２▲, 南■, 寺５●▼, 成□, □[南ヵ], 路家, 厨２●, 林家, 寺家, 福□▲, 安…/如…, 了, (人)■, 田冨□, □[寺ヵ], □古刀自, 廣万●, 缶, 常, 巳人/巳人/巳人▲, 冨徳３▲, 秋廷, □廷, 朝□/於, (一) 33／64	寺・(寺) 1／1	(寺), (南)身/月/田/園, 3／7	37／72		0／2	37／74
坏　蓋	寺, (寺)２, 塔２▲, 厨●, 富井△, 中■, (中), 大田嶌 10／15			10／15		大寺３●, 寺３▼▼, (寺), 継, □□[寺ヵ], 福/比□▲, 大福○, 真□, 橡２●, 鬼女, 厨●, 家方, (厨)２, □[厨ヵ], 池, 田冨□, 朝□[臣ヵ], (人)■, 定(福), 冨□, 供, (供), 廣万呂２●, ＋ 31／52	41／67
無台坏身	寺, 厨●, 得女, 冨(徳)▲, 麻, 万(歳)２, (常), (於) 9／10	寺・□■ 1／1	南２■, 南(榮)■, □[南ヵ], 中■, 真枚, 〒(ヘラ書き) 7／11	17／22	厨・厨● 1／2	定 1／2	10／26
坏身か盤	寺, (寺)２■, 福○, 巳人/()人/()()▲, □[常ヵ], (橡)●, 南□[榮ヵ]■ 8／20			8／20	(大)寺・大寺●, □・大寺▲ 2／2	0／1	10／23
盤	南■, 南(榮)■, 甲, 稲女, 常, (所), (供), (器) 8／16			8／16		寺, 田冨△ 2／3	19／19
小計	68／125	2／2	10／18	80／145	3／4	34／60	117／209
灰釉陶器碗	寺　1／3			1／3		□[寺ヵ]　1／1	2／4
山茶碗　碗	0／3			0／3			0／3
山茶碗　皿	こ□/とよ 1／3	0／1		1／4			1／4
白　磁	※花押　1／1			1／1			1／1
小計	2／7	0／1		2／8			2／8
合　計	71／135	2／3	10／18	83／156	3／4	35／61	121／221

多いことも、比率を高くする要因と考えられる(墨書された高台付坏身の内、転用硯と判断されるものが10点あり、その内の３点は、筆を整えたような墨痕。また、習書はその延長にある行為である)。次いで、坏蓋の内面が23.5%、盤の底部外面が7.2%、坏蓋の外面が6.8%、無台の坏身の側面が5.0%・底部が4.7%(底部の破片で「坏身か盤」の区別がつかないものを割り振ると、高台付坏身の底部外面が36.3%、盤の底部外面は9.0%)の割合になる。

器種は、墨書のないものも含めた全体の比率を、一定程度反映していると思われるが、部位を加味すると、いくつかの傾向が指摘できる。①外面と内面を比べると、外面が71.9%に対して、内面が28.1%となり、外面に墨書されることが多いこと、②高台付きの坏身は、ほとんどが底部外面に墨書されること、③坏蓋の場合、内面と外面の比率は約７対２で、圧倒的に内面に墨書されることが多いこと、④無台の坏身は、底部と側面の比率がほぼ１対１で、ほとんど底部外面に墨書される高台付きに比べ、側面への墨書傾向が強いこと、⑤外面と内面の両方に墨書されることは、極めてまれであること、などである。前述のとおり、側面への墨書は、人名の場合が多いと推測されることや、内外両面に墨書がある場合は、文字が同一で、今のところ所管を表す「厨」,「大寺」に限られることなど、墨書部位からの検討は、墨書行為の目的や使われ方を考える上で、重要な視点の一つと考えられる。

c. 筆致の分類「寺」

「寺」の筆致について、試みに次のような分類をおこなった(図17)。

A:「土」と「寸」が連綿する。	a:「土」２画目(縦)と３画目(横)が連綿する。	９点
	b:「土」２画目(縦)と３画目(横)が連綿しない。	２点
B:「土」と「寸」が連綿しない。	a:「土」２画目(縦)と３画目(横)が連綿する。	12点
	b:「土」２画目(縦)と３画目(横)が連綿しない。	４点

Ａａが最も連綿の度合いが高い行書体、Ｂｂが楷書体となる(表４「備考」欄１～33)。

図17で、まず気付くことは、「大寺」が分類Ｂａに集中することである。この内、(4～6)は同じ筆致(●)、(2,7,9)も同じ筆致(▲)と判断したが、前者は先だけをおろした硬い筆で、後者は根本までおろした柔らかい筆で書かれたもので、つまるところ、両者は同じ書き手によるものと思われる。これらは「寸」の２画目が、はねる方向に向かって曲がり、最終画の点を左方向に払う傾向がある。これに対し、Ａａに分類される(1,15)は、「土」と「寸」が連綿するだけでなく、「寸」の１画目から２画目へも筆がつながるため、勢い１画目の長さが短く、また２画目は直線的で、点は右方向に押えている。この違いは、書き手が異なることを推測させる。

「土」の２画目と３画目が連綿するか(ａ)、しないか(ｂ)の違いは、運筆の勢いのわずかな差であり、実際ａとｂの間には類似する文字がある。これは書き手の違いとは言い切れない。これに対して、「土」と「寸」が連綿するか(Ａ)、しないか(Ｂ)の違いは、運筆の勢いだけではなく、細部の形の差違としても現れ、ＡとＢの違いは、すなわち書き手が異なることによるものと仮定したい。

なお、Ａａに分類される(33)は、１画目からあまり押えずに筆が流れ、最後の点は押えることなく、丸を描いて勢いよく払っている。最も達筆で、ほかの文字に共通する特徴が見いだせない。

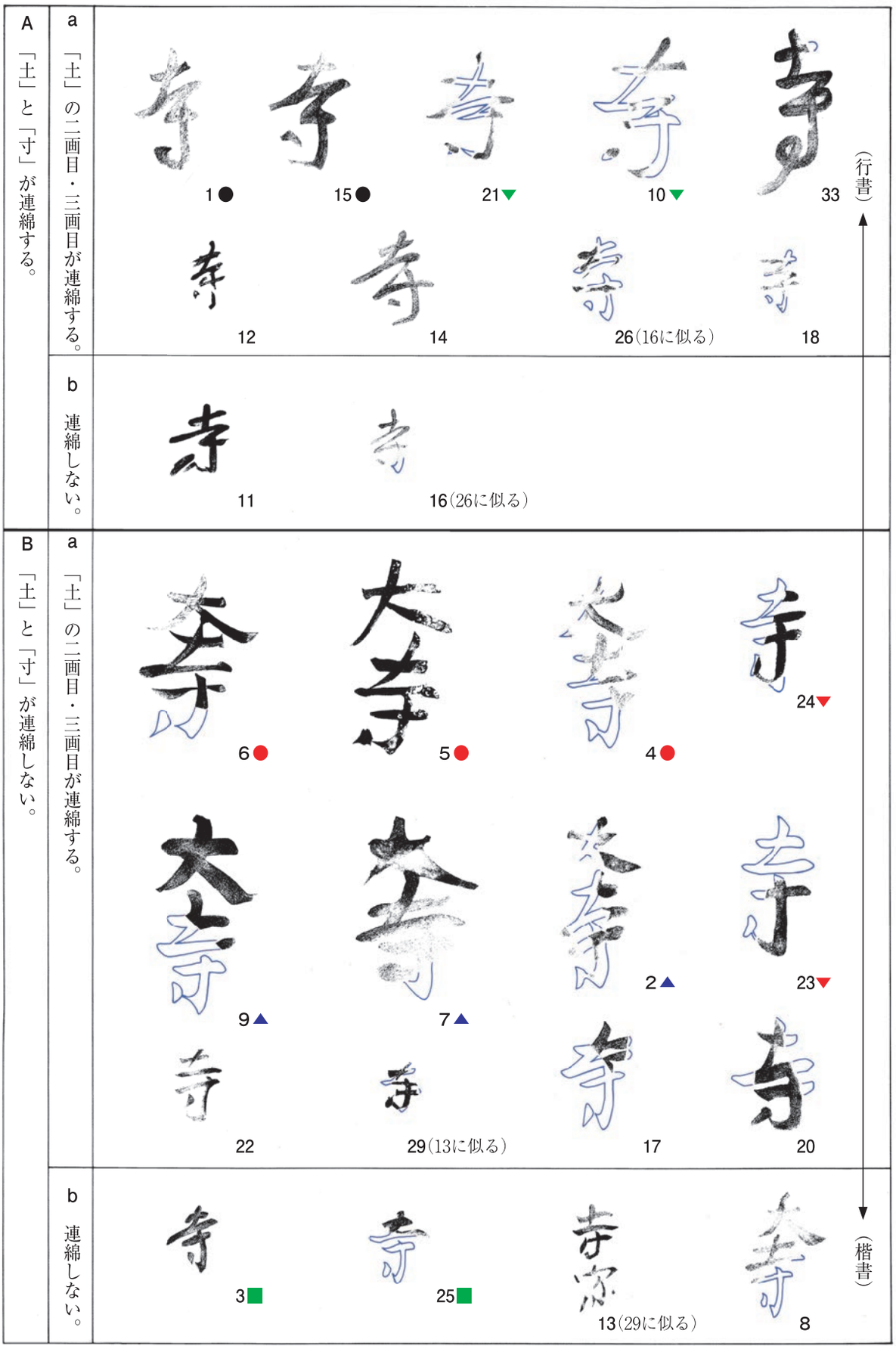
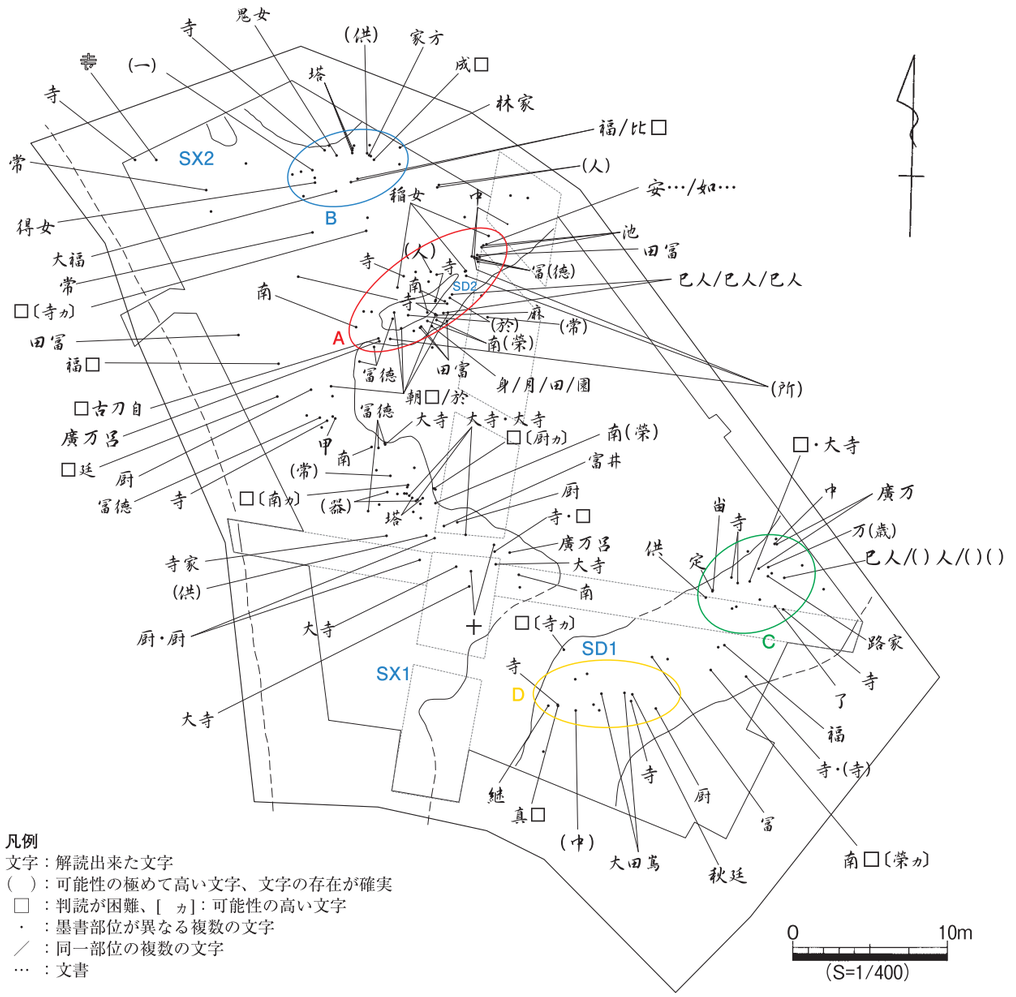

A
「土」と「寸」が連綿する。
a
「土」の二画目・三画目が連綿する。
1●
15●
21▼
10▼
33
12
14
26（16に似る）
18
b
連綿しない。
11
16（26に似る）
B
「土」と「寸」が連綿しない。
a
「土」の二画目・三画目が連綿する。
6●
5●
4●
24▼
9▲
7▲
2▲
23▼
22
29（13に似る）
17
20
b
連綿しない。
3■
25■
13（29に似る）
8
（行書）
（楷書）

図 17　筆致の分類「寺」



凡例
文字：解読出来た文字
( )：可能性の極めて高い文字、文字の存在が確実
□ ：判読が困難、[ヵ]：可能性の高い文字
・ ：墨書部位が異なる複数の文字
／ ：同一部位の複数の文字
… ：文書

図18　墨書土器出土状況

d. 出土地点・層位

出土した地点をプロットし、解読できたものについては文字を示した(図18)。これを見ると、井泉1(SK36)からＳＤ２を中心とする範囲(A)、ＳＸ１と２が合流する地点の岸寄り(B)、ＳＤ１の篝火の跡に近い岸寄り(C)と橋状遺構の上位(D)に分布のまとまりがある。それらの間にも、いくつかの小さな単位を見いだすことができる。Dは、橋状遺構に流れが堰き止められて溜まったものと思われるが、Aは、まさに祭祀が最も頻繁に行われたと考えられる場所である。そのほかの単位も、おおむね岸辺に沿って分布している。すべての墨書土器が祭祀に関わるとは限らないが、少なくとも流路への働きかけを含む、岸辺での営為を反映していると思われる。

出土した層位を表３に示した。ただし、複数片が接合した場合で層位が異なる場合は、最も下層から出土した破片によった(表４「接合関係」欄)。本流ＳＸ１の上層に集中していることがわかる。一方、ＳＸ１とＳＤ１は、発掘調査の区域内で合流していないにもかかわらず、接合する資料がある。どのような営力によるものか、注意する必要がある。

表３　墨書土器　出土地点・層位

※番号・文字(須恵器,灰釉陶器,白磁,山茶碗,そのほかの遺物)・筆致の比較　点数

Ⅱ	154, 215, 219 花押 *3*	Ⅰ～Ⅲ	18(寺), 180 *2*	排土 175 *1*
Ⅲ	26(寺), 82, 130, 172, 176, 196, 211, 212こ□/とよ, 213, 214, 217 *11*			西1区 72 鬼女 *1*
				SK11 160 *1*

ＳＸ１（ＳＸ２）	ＳＤ２	ＳＤ１
〈層位不詳〉 7 大寺▲, 27 林家, 29 寺, 35(厨), 70(南), 96, 108 大福○, 134, 140 □[常ヵ], 147, 155, 158, 166, 192, 193, 201, 202, 203, 218 *19*	〈層位不詳〉 12 寺, 35 冨(徳)▲, 54 廣万呂●, 95 麻, 65 南(榮)■, 69 南■, 71 身/月/田/園, 73 □古刀自, 126(所), 150, 167 *11*	〈層位不詳〉 52 廣万●, 135, 139, 173, 207 *5*
-R1-1 62南■, 164, 191 *3*	-1 76 安…/如…(SK36と接合), 119 中■, 145	
-R1 4 大寺●, 6 (大)寺・大寺●, 8 大寺, 10 寺▼, 13 寺家, 16 寺, 20 寺, 21 寺▼, 22 寺, 23(寺)▼, 25(寺)■, 30(寺), 31 家方, 32 □□[寺ヵ], 33 寺, 34 厨●, 36(器), 38 厨・厨●, 39 厨, 40 □[厨ヵ], 41(厨), 43 厨●, 44 田冨△, 48 富井△, 49 冨徳▲(SK18と接合), 50 冨徳▲, 51 冨徳▲, 53 廣万呂●, 56 真枚, 58(人)■, 59(人)■, 61 南(榮)■, 63南■, 66 □[南ヵ], 67 □[南ヵ], 80 塔▲, 81, 84 塔▲, 85, 87(供), 88(供), 90 定(福), 101 成□, 102 福/比□▲, 106, 109, 112(橡)●, 117 朝□[臣ヵ], 123, 128, 129, 132, 133, 136, 141, 142, 144, 146, 149, 151, 152, 156, 157, 159, 161, 163, 165, 169, 170, 174, 178, 179, 182, 183, 184, 185, 187, 189, 194(一), 195(常), 197, 200, 205, 206, 210□[寺ヵ], 216 *86*	-2 46 田冨□, 111 池(SK36と接合) -5 15 寺●, 60 巳人/巳人/巳人▲, 114 朝□/於, 115(於)	-R1 1 寺●, 9 □・大寺▲, 11 寺, 14 寺・(寺), 17(寺), 24 寺▼, 28 路家, 37 厨●, 55 真□, 68 南□[榮ヵ]■, 89 供, 91 定, 92 凿, 97 秋廷, 100 万(歳), 103, 104, 107 福○, 113 橡●, 116 橡●, 118(中), 121, 122, 127, 131, 137, 138 □[寺ヵ], 148, 153, 190, 198, 199, 208 寺, 209 *34*
-R2-M1(R2層を開析した流路の堆積) 2 大寺▲, 3 寺・□■, 64 南■, 99 万(歳), 125＋, 162, 168 *7*		
-R2-M2(R2層を開析した流路の堆積) 5 大寺●, 42 厨●, 47 田冨□, 77 稲女(SD2-1, SK36と接合), 98 □廷, 168 *6*	*9*	
-R2 19 寺(ヘラ書き), 75 甲, 78 得女, 93 常, 94 常, 105 福□▲, 124, 186, 188, 204 *10*		-R2 74 大田嶌, 83, 86 *3*
ＳＸ１とＳＤ１(両方から出土した破片が接合したもの)		
-R1　45 冨□, 57 巳人/( )人/( )( )▲, 79 了, 120 中■, 143, 171, 177, 181 *8*		
-R2　110 継 *1*		

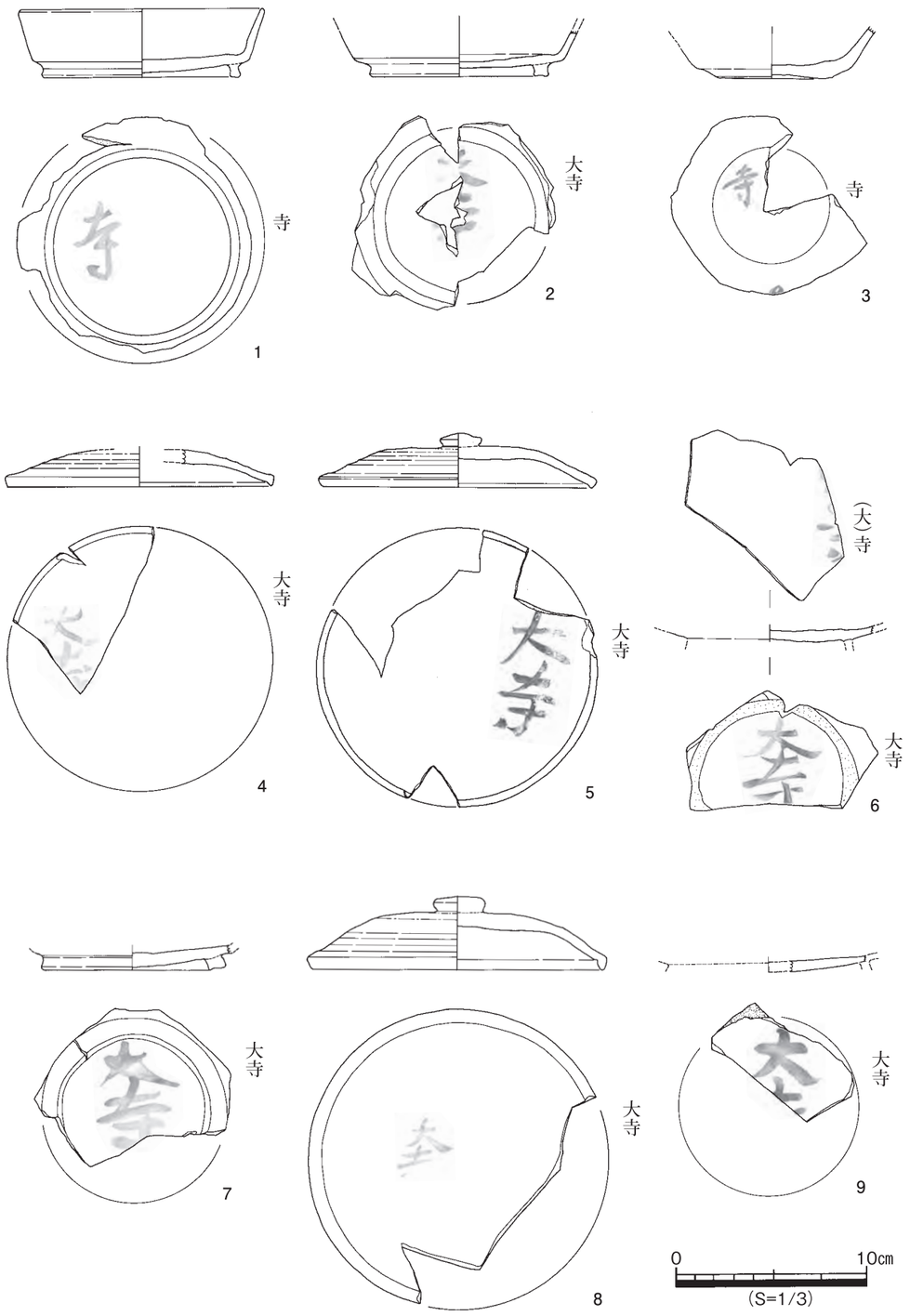


図19　墨書土器１

墨書土器１

寺
10
寺
11
寺
12
寺家
13
寺
14
寺
15
寺
16
寺
17
寺
18
寺（ヘラ書き）
19
寺
20
0 10cm
(S=1/3)

図20　墨書土器２

墨書土器２

寺
21

寺
22

(寺)
23

寺
24

(寺)
25

(寺)
26

林家
27

路家
28

寺
29

(寺)
30

家方
31

寺
33

32

0 10cm
(S=1/3)

図21　墨書土器３

21

22

23

24

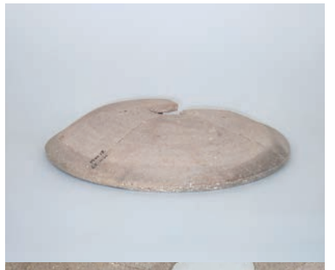
25

26

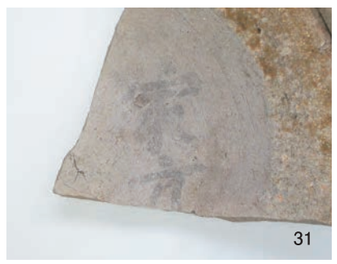
27

28

29


30

31


32

33

墨書土器３

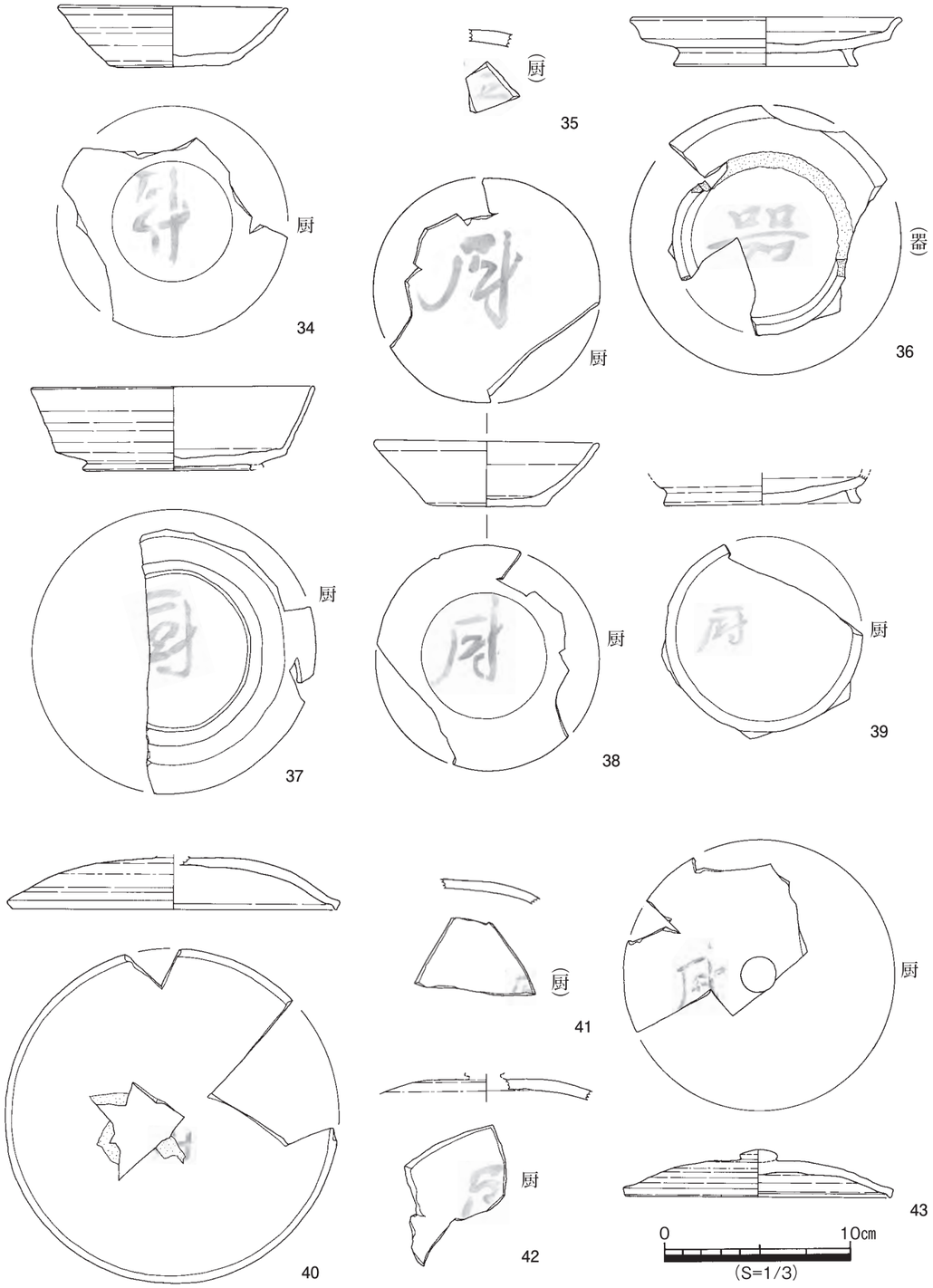
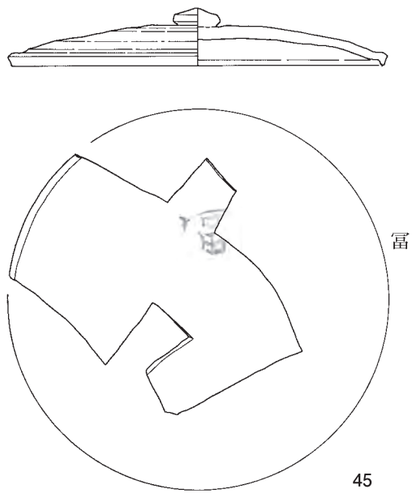


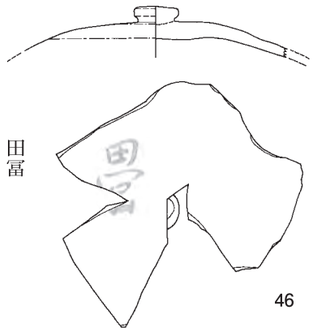
図22　墨書土器４

墨書土器４

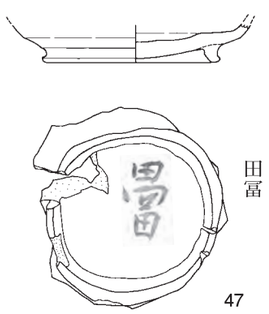
44



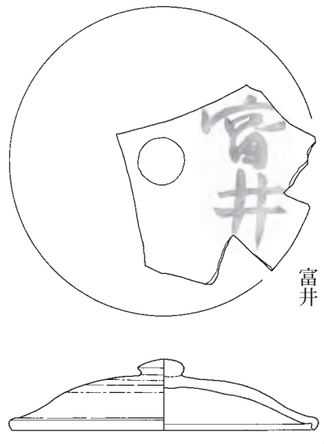
45



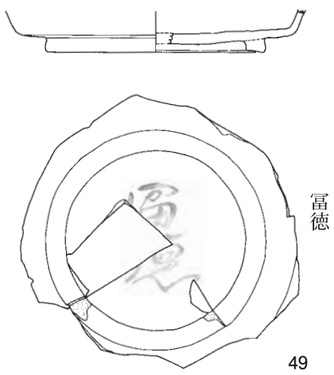
46



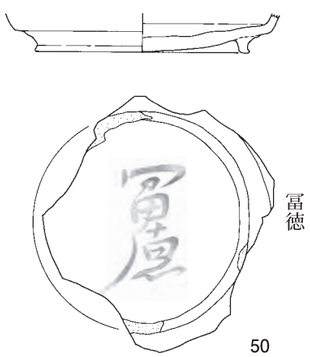
47



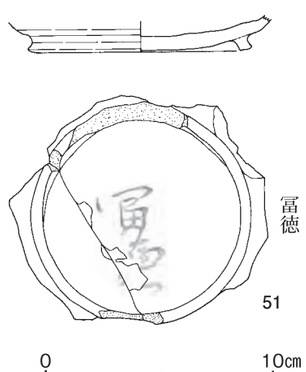
48



49



50



51

0 10cm
(S=1/3)

図23　墨書土器５

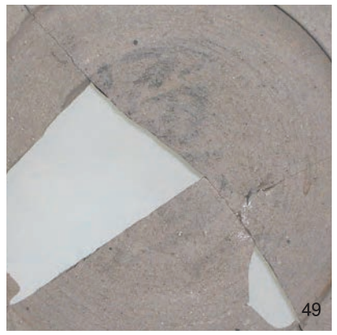
44

45

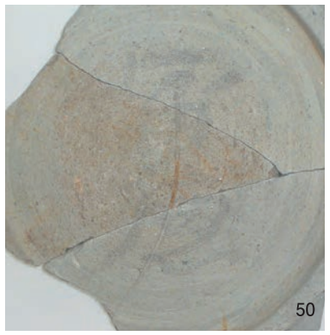
46

47

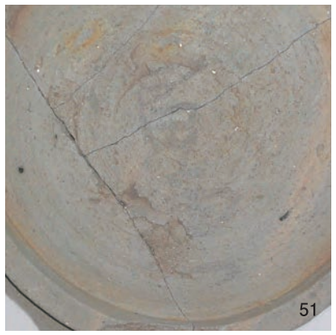
48



49



50



51

墨書土器５

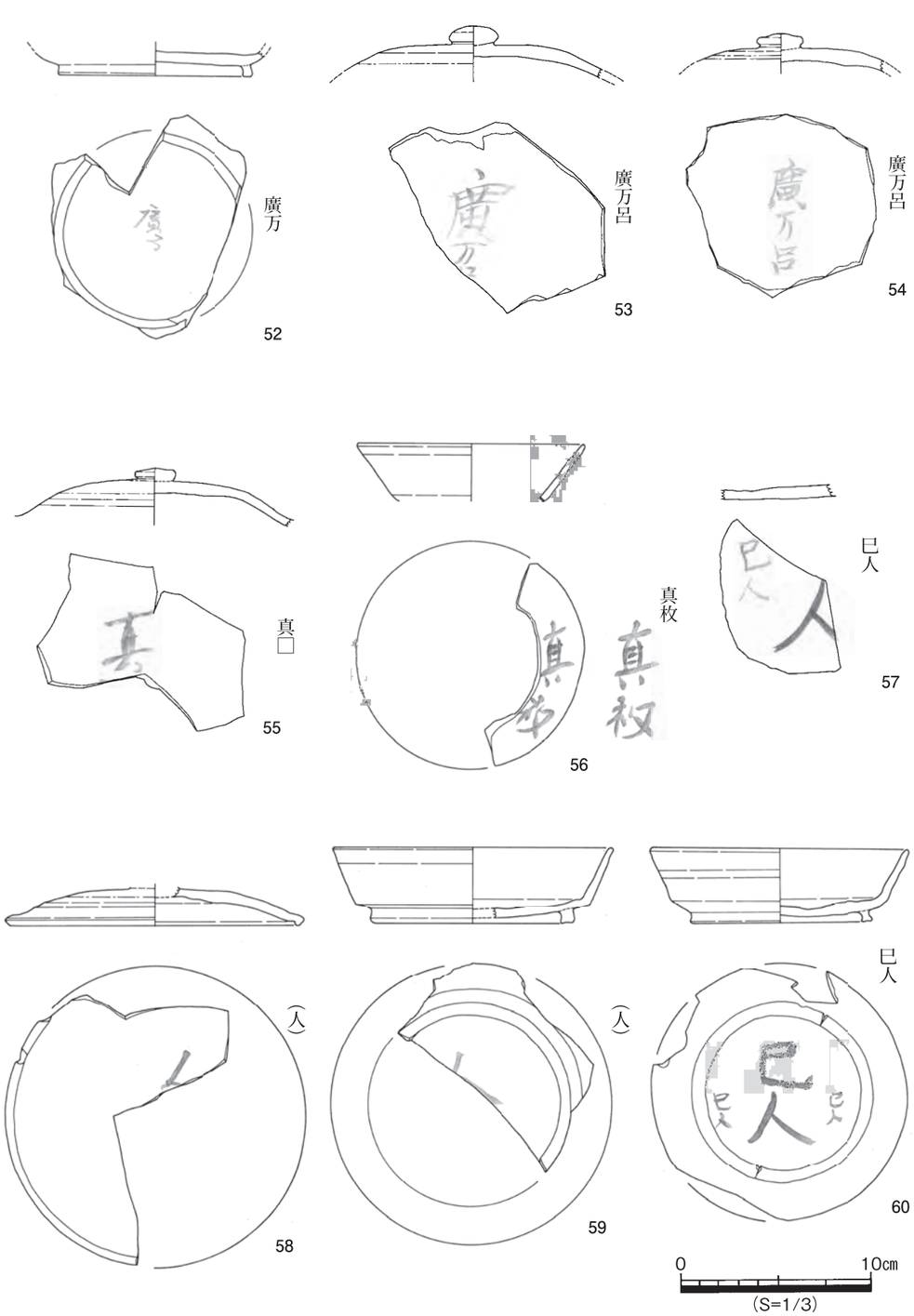
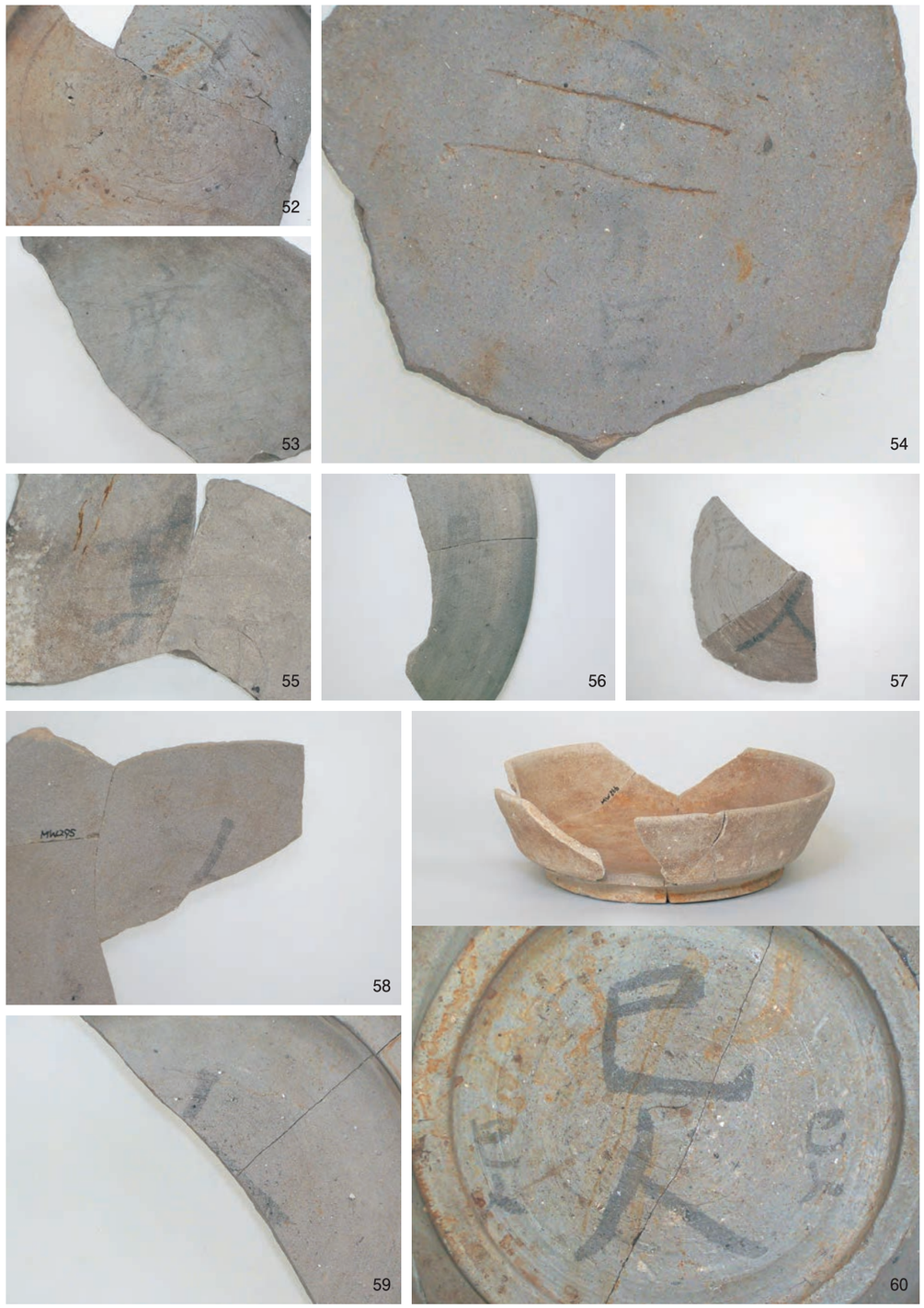


図24　墨書土器６



墨書土器６

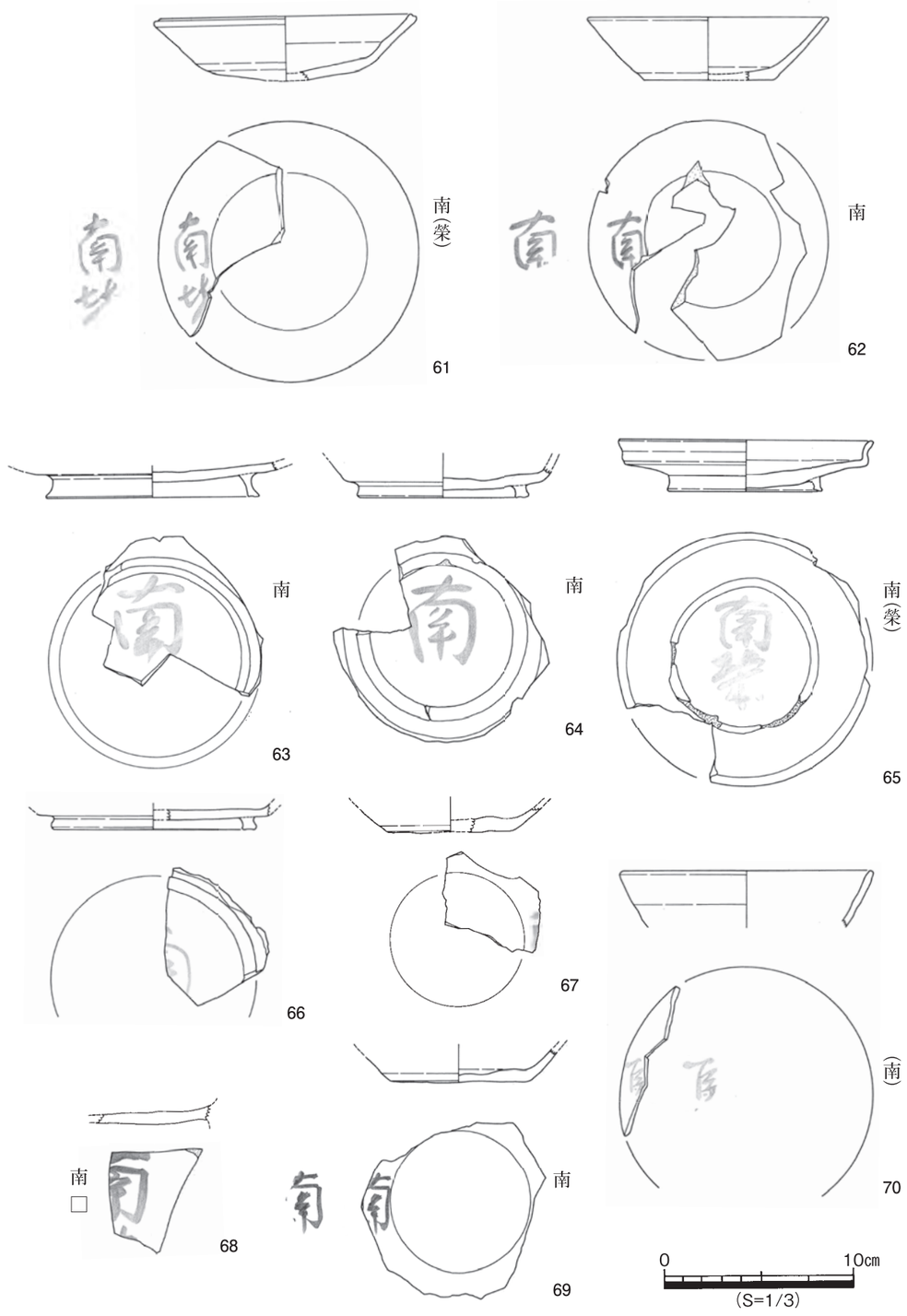
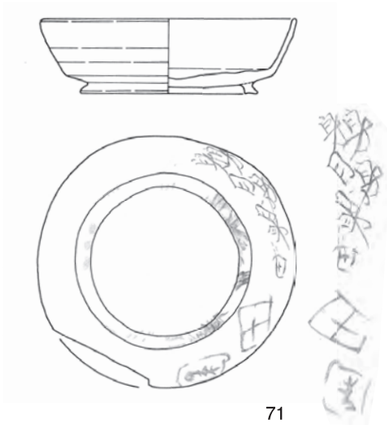
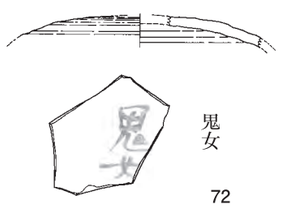


図25　墨書土器７

墨書土器７

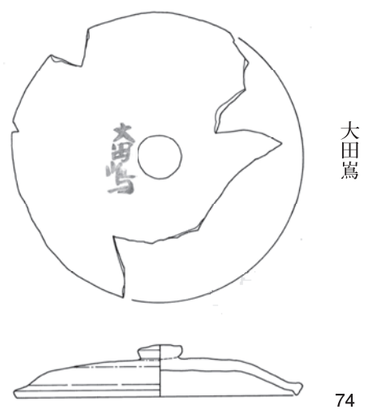


71

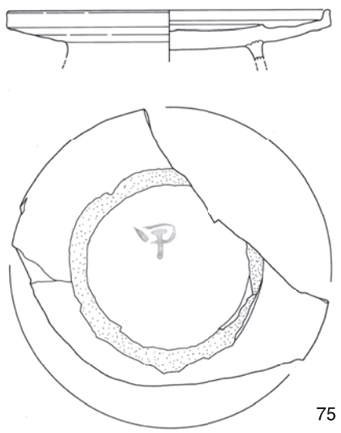


72

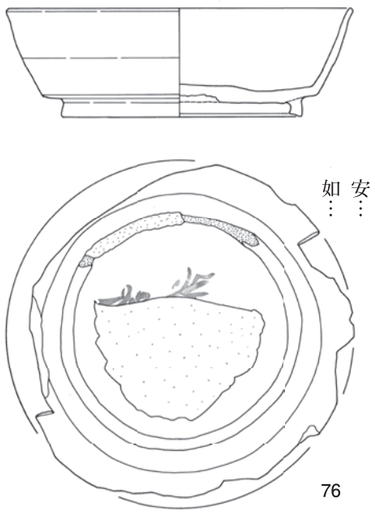
73



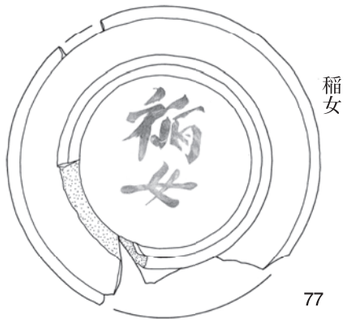
74



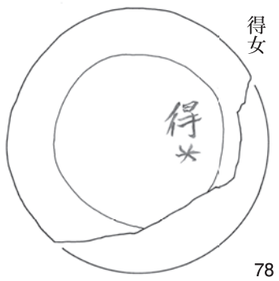
75



76



77



78

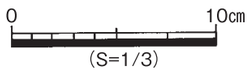


図26　墨書土器８

墨書土器８

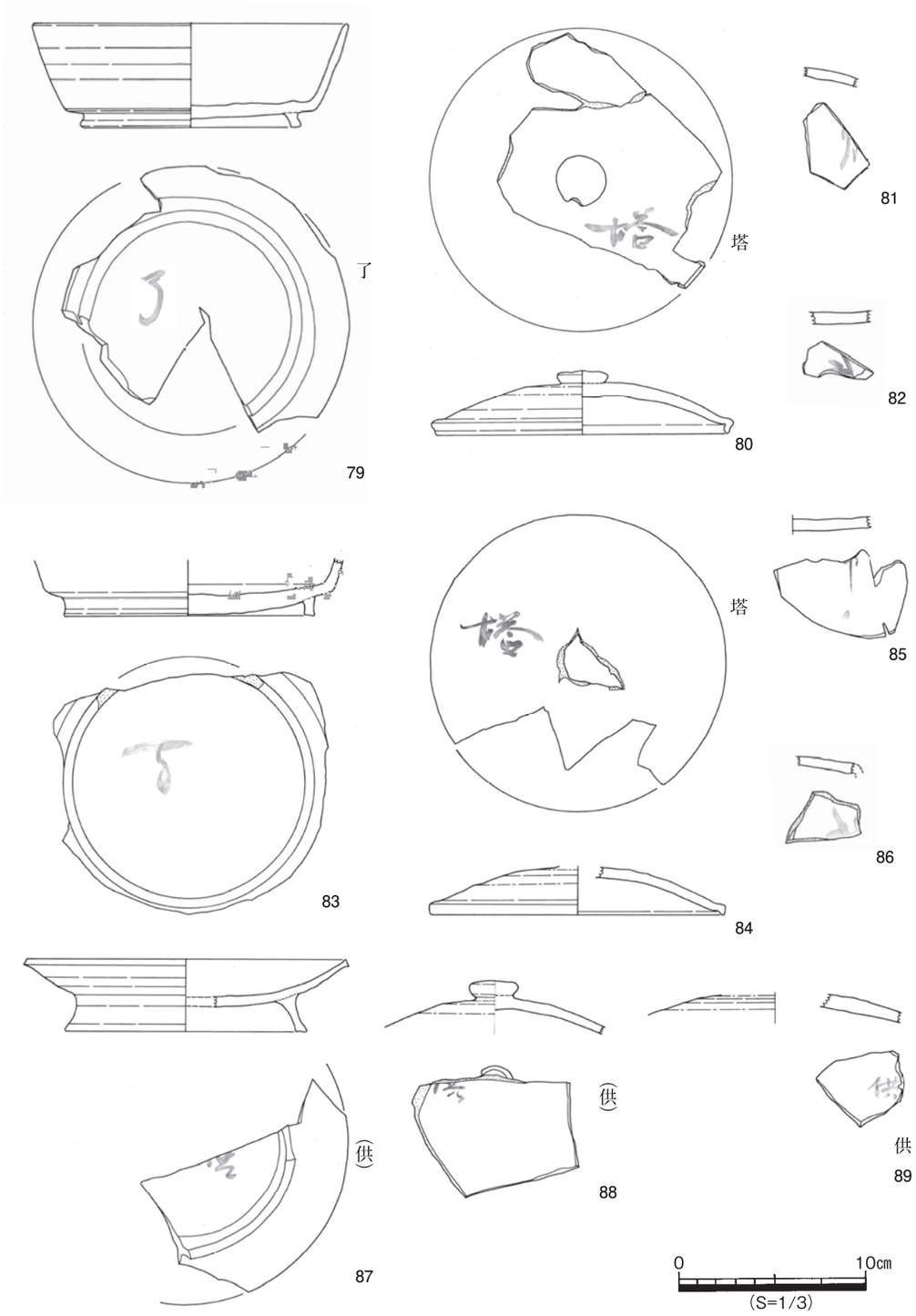
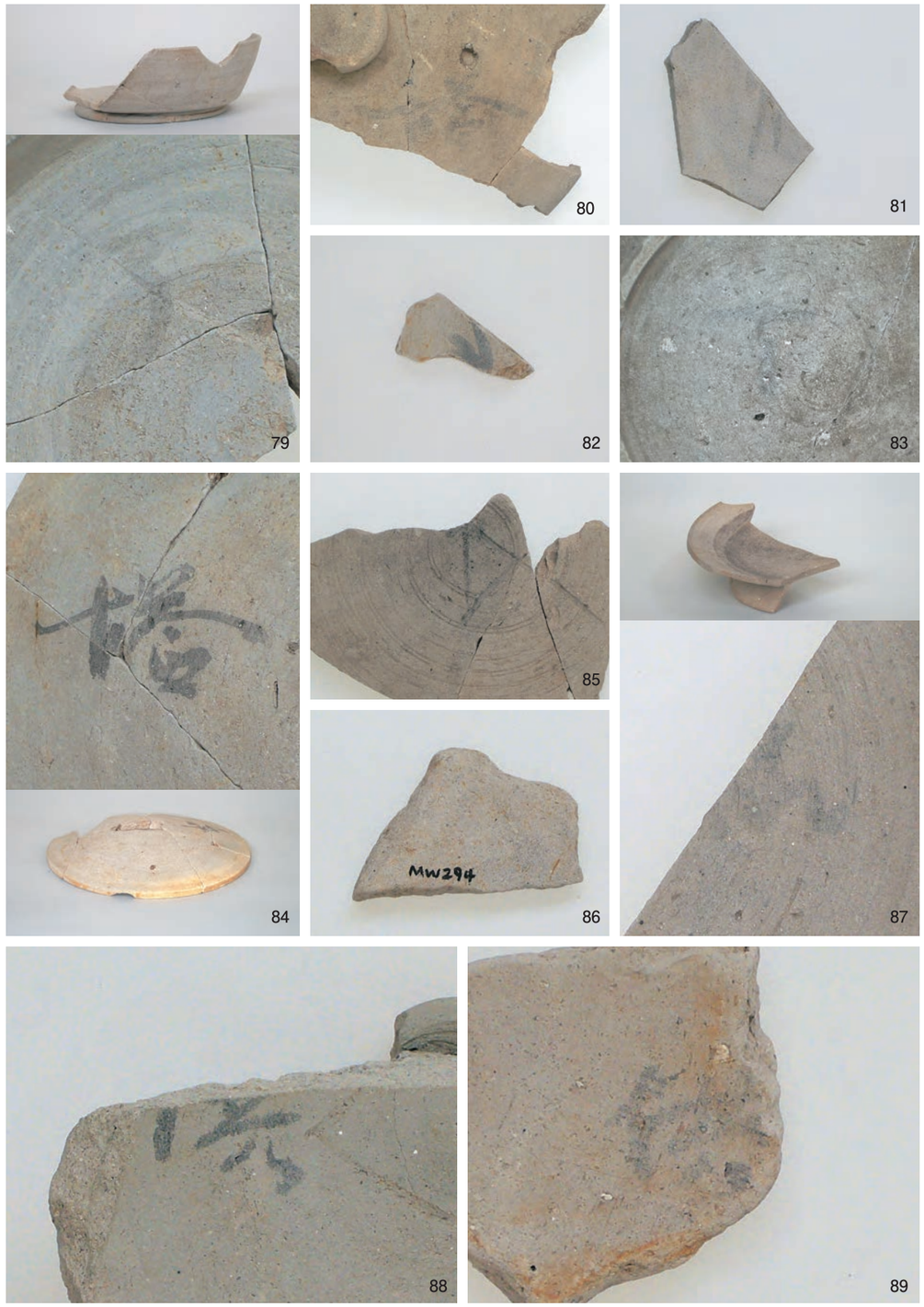


図27　墨書土器９



墨書土器９